

小笠原孝次述

無門關講話

推稿  
原稿

008, 101, 800  
 003, 200, 200  
 (A 000 A Y 000) Y 000  
 (A 000 A Y 000) Y 000

〈由野るやてく言〉

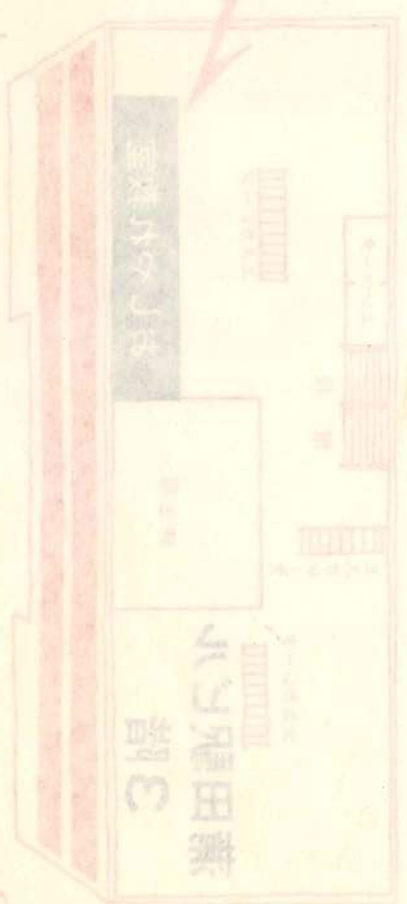
神道無門関研究會(第一回)

七月三日の雨の降る午後、千駄ヶ谷の富士駐車場事務所(安西達子氏経営)に井上大教、七條記曾一、島田親浩、小笠原夫妻の五名が集まって、小人数で静かな会を開いた。先づ原文を日本語で島田氏に読んで頂き、それに基いて一々解釈を加へながら話し合ふ方法をとった。話してやる向におのつと神が治らいて行く。神道との結びが明らかになって行く。これから五、六回は続ける予定である。講義のために予め何の用意もして来ない、ぶっつけ本番で話し合ふ。

八幡田藪 3畝

空姦木文は

八幡田藪



八幡田藪

八幡田藪



つるまじい  
たをほひせ。

その自己中に刻み  
彩つて眞美大なり  
画像を創るこれが  
精神ありけり。

神道の入門として數算鈔を説いた後引續いて無門関の研究であるが、念佛と禪のいつれの場合にても宗教は理屈ではなく実地の体験であるから実修を伴ふことを必要とする。毎日せめて三十分間、專心称名し、或は只管打坐する規則をみづから定めて実行することである。実修を伴はなければ折角讀み聞きした聖教も、水で貼り付けた紙のようにその場限りで剝がれてしまふ。「念佛法生採取不捨」「一座の切、無量の罪を滅す」と云ふ。宗教は云はば自己を素材とする藝術である。その自己に直接培養、刻み彩るまでもある。自分の内面としなければ、キリスト教も佛教も神道もすべて觀念の遊戲に過ぎない。禪はずべてま自己主體の問題として、前より神道に歸へる道である。先遣きは向學はしは是れは公認ホト取能む行こう。

(一) 趙州狗子) 或時趙州和尚に僧が問向した。大に佛の性質があるか無いかが、引は答へて無と云つた。  
 禪師の関門を問ふと云うが、自己の心に引ずられるままで

参照は須らく祖師が設けた無門の関門を通過しなければならぬ。心も疑視してその我修勝手な動まを絶たなければならぬ。其処まで行かぬ人間は常に何かに依頼し、誰かの思想を真似し受賣りして生きてゐて、天から授かつた自己本来の主體性の尊厳を知らぬ。これを依草附木の精靈と云ふ。憑依靈と云ふとたまたましむが他所からくつた様に感じられるが、実はその靈(鬼)に自己が憑依してゐるのである。

祖師の関門とはこの「箇の無字である。禪宗のたつた一つの関門である。此処を通過したならば趙州に眼のあたり会ふことが出来るのみならず、達磨以来の厄代征光伝燈の祖師達と共に手を取り、眉を連ねて、同一一つの眼で見、耳で聞く、まことに慶快なものである。何としても此の関門を透らぬはならぬではないか。祖師達の心が坐るばかりではない、現在今の世界に生きてゐる誰と誰が佛であるか、判る。逆つて釈迦が佛陀であり、キリストが神の子である所以がはつきり判る。いやそれだけでは

自己即宇宙としこの不二一の  
本来の自己の有り方の状態

新刊

新刊



ない、更に勤めて世界を纏繞し給ひて居られる転輪聖王天津日嗣天皇の大御心が由つて来る所が明かに感得される。禪こそ、すなはち無字こそ佛教、キリスト教のみならず神道の入門である。

その爲には全身全霊を挙げて疑向させ、この無字に参るがよい。自今に判らぬことが此の世界に存在する。その心境を説ふことの出来ぬ人向が此の世界に居る。釈迦やキリストや達磨がそれを知つて居り、この人達こそ人向である。それは無と云ふことを弁まへてゐる人達である。自分も同じき人向であるからにはそれが判らぬわけはない。自分もすべてを置いて何よりもその境地の自分にやらねばならぬ。この梯に決意し誓約して無字に参り参るのである。

斯うして置ても殊に殊な向も思慮工夫するのである。無と云つても何も無いことではない。また何とかが無いとかの向題ではない。考へても判らない無字を工夫してゐるうちに、それによつて従末の自己を構成してゐた色々様々な他より借入れた知識や悪習慣のすべてが反省され懺悔され盡す。斯うして段々に魂の淨化が進み、最後の機縁が熟した時、今まで固く閉じてゐた自我の壳が破れて、外の宇宙と内なる我とが一ツになつた素裸の我を發見する。夢かと思つても決して夢でない明々白々な我とした世界が開ける。これが大宇宙であると言ふことがはつきり判る。然もこの事に就て何の証明も証拠も必要としない、誰の知慧を借りなくとも疑なく自分でせうたとはつきり判る。

この時此の大宇宙の生命へ刀と知慧が發現すれば、神を驚嘆せしめ、人の心を導き、開羽の大刀をみづから手に奮ひ得て、佛に會へば佛を殺し、達磨に會へば達磨を殺し、みづからが生身の佛陀、達磨となつて、愛憎、利害、得失、是非の生死の世界のうちに在つて大自在に道を切り開いて行くことが出来、如何なる境界、如何なる困難に居ても遊行三昧に生きたり行くことが出来る。どうやつて此を勉強するか、全力を挙げてこの無字にぶつかつて行き、途中で挫折しなければ法の灯火がみづからの内



狗子に仏性有りやせしやしよと狗道の全部を握りし止し、内道である。  
 これと有、其の同途とと取扱つるは生命の力なきを去ふ。

に点つてある。(以上が第一則の意味である)

無に就て更に述べる。無き哲学で「否定の否定」なども云ふ。無は存在するものではなくて、力であり働らきである。無に参じ、無き参し、無き稗し、無にぶつ、無き無きまへ、無にけなしたものになつた。斬うした像法末法の時代の面、真言や種が此のつて行くことは、半面にその無でないもの、無に当らない事さみづからの中から一叙の意義を實地に把握して看す。無は神劔の活用、妙用である。佛教が再び神道と蘇つて行くことである。無でない考へ方、やり方を天道憊倫して行くことと返へらせなければならぬ時となつた。須佐之男命が太刀を奉る時である。然る後佛教は改め、神道から摩尼(布斗麻面)ま字はなければならぬ。(以下略)

無の判断

斯うして此の無の権威を信じ、無に據つて無でないものも自分の中から、真の自我に非ざるもの、他所から来た仇し思い、非我の思いと取除いて行き、も早やこれ以上清淨の余地が無い所まで煮詰まると、その時忽然としてその無の力、無の活らきがついて起る生命の智慧の根源の世界が開ける。このなまとした世界の体得が禪の云ふ見性成佛である。その時までは自分の成佛を信じ、無を信じ、無に非ざるものと戦つて来たのであるが、それ以後はその無さみづからの天与の力として自由に活用することが出来る。この曉無とは正知是非善悪に對する人間本具の判断力であつて、この活用を南將軍の太刀に喩へてあるのである。無は見性以前にあつては自己と戦い以後に於ては世界の宥狂実相を裁断する不動明王の慧劍である。

太刀あるいは劔と云ふ言葉は宗教上の比喩的文として常に用いられる。「劔偈天三十年柔劔客」「珍重大明三尺劔」等は禪語である。神道では十卷劔、九卷劔、八卷劔、草薙劔、輕劔の太刀、布留布都の太刀等々の言葉がある。すべて禪の此の無の活用、未だ意味する。劔、劔、太刀は物体を斬る器物であるが、形而上の判断力は物事の實在真相の内容を剖けて識別する。その活きは劔の劔に似てゐる。鉄の劔を記すことは宗教の呪物である。「形而上ま道と云ふ、形而下も器と云ふ」(大字)とある。十、八等の教理は事物の判断法の詳細の種別である。

劔は神道三種の神器の第一であつて、上古朝廷より節刀として此の劔の允可を授

護法の要儀を果ししとある。

三種の神表(金作の)

けられた。日本武尊、坂上田村麿、四道將軍等が此の劔を活用した。無きも神道無の意義が若く隠れすると共に、神劔を用ひる者が絶えたわけが、遂には今日の如く神道無の意義を實地に把握して看す。無は神劔の活用、妙用である。佛教が再び神道と蘇つて行くことである。無でない考へ方、やり方を天道憊倫して行くことと返へらせなければならぬ時となつた。須佐之男命が太刀を奉る時である。然る後佛教は改め、神道から摩尼(布斗麻面)ま字はなければならぬ。(以下略)

思はれるもの

我平和を奪らうんがため未だと四つ物、劔と取せんが為なりとキリトリ加ふるつてゐる。

形而下の器(物作)を以て形而上の道(道徳、精神)を以てしものから動上のもの物である。



神通から  
見た 無門関講義

(第二 百丈野狐) 百丈和尚が日頃参禪説法の時一人の老人が居て、常に衆の後ろで聴聞してゐた。衆僧が退けば老人も退いた。所が果せきかな或日老人は帰らなかつた。そこで百丈が向ふた「わしの前に立つお前は一体何者が」。老人が云つた「私は人向てはございませぬ。昔迦葉佛の時この山に住して居りました僧侶でう。或時修業者が傾向しました。大修業をした人でも因果に落ちることがあるが、それとも因果を抜けて自由の身になれるか。私は因果に落ちずと答へました。その爲私は生きたり死にたり五百生も野狐の身に墮ちてみます。苦しくて存りませぬ。今和尚から私の心を解すお言葉を頂いて、この野狐身を脱け出させて頂き度く存ります。斯う云つて老人は改めて向ふた「大修業を人違つて因果に落つるやまた無しや」。百丈は答へた「因果を昧まます」と。老人は高下は大悟し礼さして云つた「私はも早や野狐身を脱し後の山に住まひます。僧侶が死んだ時の例にならつて取扱つて下さるよう」。

百丈は役僧に命じて板木を打つて衆を果めて告げた。「食後亡僧の葬儀を行ふ。これま聞いて大衆は言談した、一山の衆皆安泰で病室にも病人は居ない。何人の葬式をするのか。所が食後百丈は衆僧を率いて寺の後の巖の下に行き、杖さもつて一匹の野狐の死骸を掘り出して火葬に附した。

晩になつて百丈は法堂に登つて前の因縁を説いた。その時黄蘗が向ふた「老人が錯つて一転語を答へたために、五百生野狐の身に墮したと云ふが、転々錯らず野狐であるなら一体どうなるのか」。百丈が云つた「もつと前へおいで、彼の老人のために説明しよう」。そこで黄蘗は近くに前へいきなり百丈の横面に一掌を加へた。百丈は手ま拍子打つて云つた「連磨(胡)の鬚は赤いと思つてみたが、なるほど赤鬚の連磨が居るやい」。百丈は

無門白く「不落因果と答へて、何故野狐に墮するが、不昧因果と答へて何故野

第=21  
5



狐身を脱するが、此処の所を見破る見識を得たならば、前百文(百文の前身)すなはち彼の老人が、転々として五百生野狐であつたことがそのまま尻流三昧であることと知り得る。

不落と云つても不昧と云つても、(養)ころは二つだが、出た目は一つ、同じことである。だがこれを見破らずに不落不昧と論つらつたらむとい錯り(千錯る錯)である。(以上公案大意)

誤つた考へ、誤つた考へ方(ゴゴゴ)に慮はれてゐる者も広く種では野狐と云ふ。みづから野狐であることに気が付かない時は、知らずして世の中に禍を播くみづから野狐と気付きたら、その思ひから抜けられず、解決の道が見付からぬ時は地獄の苦しみである。

ところで自覚無自覚に拘らず野狐の思ひに占領されてゐる者の姿は、虚心にそれを見る者の眼に時に野狐やその他の動物(狗、狸、蛇)の姿として写る。所謂靈狐靈獸である。靈狐には白狐(神道思想の白狐)と金(黄毛)と黒狐(鬼道の黒狐)とがある。人間には元末理論的に明かにすることの出来るものである精神的本能認識の相と姿や像に象徴して観る造形能力がある。この能力を顕著に發揮する人とならない人の差異があるが、実際に眼に見る如くにその姿が見えるのである。

だが靈狐は心象の映像である。客観的にとらえたものが何らわけではない。この能力は同じく如未や菩薩像を描き出す藝術家の能力でもある。近代の抽象画の意義とも通じてゐる。すべてがせうとは云へないが抽象画は狐の画すなはち野狐の自画像であるものが多い。(白狐靈金毛靈先生の歴史的な因縁に就ては別に改めて説く)

自分の考へ、考へ方は何処が間違つてゐる、人間並みの精神状態ではないと思ふから「某甲は非人なり」と云ふ。誤りと知つても野狐の思惟自体には其処から抜け出す道が利らぬから苦しくて耐へられない。世人に向はれて、修業をへすれば因果から板

錯覚ども幻覚どもない。自証を伴つてゐる

その昔、虫や神を皇が神岩の同本共處と瘞止して神道の実作が隠没して以来、神道を不めて神道のまじり待たず、これに憧れて努力を怠ける思ひが神道(神道)の理をうつフレックスとなつたのが白狐である。所謂神のお使姫である。

またその昔、エルサレムのレオ神教(レオ)エカヤの神教が隠没し、民族は國を去る漂泊を身にしみて、神の故郷であるエデンの後師としてあらゆる多岐、推道、霸道の行使を辭す白いてこのエカヤの思念のコンプレックスが金毛の狐である。金毛靈は神武雄毅の系族から日々に放棄した。また以上の白、黄、黒狐以外の宗教的、思想的根拠を持たない物態、性慾の錯倒が黒狐である。



けられると答へた所、その答へは錯りであつた。然らば修業しなければ因果から抜けられない事となり、それならその修業は何かと云ふことになつて、コンプレックスはいよいよ深くなつて行く。斯うして五百生の間因果に没在して野狐身の儘で転々として今に至つてゐる。だが野狐の思ひ自体には自己を救済する力がない。百丈に救ひの「転語」の教示を乞ふたのである。

老人は改めて向ふた。大修業念の因果に落ちるかどうかと。ここまでが「精一杯の野狐の思惟の限界」である。百丈は答へた「因果を昧まます」と。老人はこれによつて言下に大悟して野狐身を脱することを得た。

切てこれからは百丈の箇中の夢物語であり、主観の譬へ話して見るべきである。老人は野狐の葬式を亡僧の例に倣つて執り行つて呉れることと百丈に頼んで裏山へ帰つて行つた。百丈は食後大家を連れて裏山に至り、杖を以て野狐の死骸を掘り出して火葬に附した。但し霊的な野狐に色身肉体があるわけはない。精神的な狐霊と動物の狐とは無関係である。憑依靈を淨めて元の空に還へす操作は神道では修祓と云ふ。以上の事は百丈の内心に於ける靈的操作を物語つたものと見るべきである。

更に晩になつて百丈は講堂に登つて以上の因縁話を取上げて説法を行つた。所が傍から黄檗が眞向した。若し老人が転々錯りす野狐が五百生依然として野狐であつたなら如何うだと云ふのか。斯う云はれても百丈はまだ気が付かず「近くに道め、老人のために説明しよう」と云つたので、黄檗が一掌を喰つたのである。そこで百丈はようやく吾に還つて手を打つて笑つて云つた「……なる程赤髯の達磨が居るわい——他人の話したと思つてゐたが、どつこいこれは私自身(前百丈)のことだつたのだ」。

百丈和尚は敏感な、カントの所謂視座者であつた筈だ。不落因果も不昧因果も同一ことである。因果輪廻業縁から抜け出て自由な身になりたいと思ふことはすべての衆生の願ひであり、その爲に其処らの民間宗教が横行するのであるが、大修業をしたとてそれによつて因果から抜けられるわけのものではない。因果から抜けようとして







無門関研究會 (第二回)

七月九日富士駐屯場で才二回の研究会を催した。参会者下記(井上大教、七條記雷一、柳濤博、入来聖彦、島田親浩、西村宣柄、小笠原孝次)。前回の如く島田氏が読み、小笠原氏が神道布斗麻呂からの解説を加へ、更に検討を続けた。要旨をの如し。

(第三則 俱胝堅指) 俱胝和尚は眞向を受けると、唯だ指を一本立て、答へた。沙彌の小僧に或人が向ふた。和尚は何ま説法されてゐるのかと。小僧は指を立て、和尚は眞向をした。俱胝がこの事ま聞いて刀でその小僧の指を断つた。泣きながら逃げて行く小僧を指が呼び止めた。振返へると指が指を立て、ゐた。それを見ま小僧は即座に悟りを得た。俱胝が死に際に弟子達に言つた。私は師匠の天龍がら一指頭の禪を教はり、一生用ひて盡きなかつた。言ひ終つて息を引取つた。

悟りは指先にあるわけではない。その心が利せば天龍、俱胝、童子と自己と一つ心であることが判る。

俱胝は天龍の禪をよく受取つた。それによつて小僧を戒めた。大昔華山と首陽山



とは一つの山であつたが、河神がそれを削いて河を通したと云ふ。俱賸の指先は葦山の重畳たる山波を自由に切り開く（以上原文解）。

俱賸の指を立てたのは如何なる意味か知らぬが、自分で指を立て、見るとその形が何と云ふは自ら身にやかる。この指はそのまゝに神道の斂の姿である。斂の形は

横直立させる時これを元々御柱と云ふ。「下津警根に宮柱太敷き立」と大夜祝詞にあるが上は高天原の頂点から、下は地獄のどん底まで貫く一本の柱が宇宙の真中に、そして今此処に立ってゐる。我今此処に在りと云ふ自覚の实体であり、判断の根拠である。神道五部書には「心の御柱、一心の靈石、諸神要道の本基」とある。伊勢神宮ではその形を本殿中央の高さ五尺（アオウエイ）の白木の柱に象徴してゐる。キリスト教ではこれを「アロンの杖」と云ふ。古代エジプトではこれにオベリスクに象徴した。オベリスクは

「天龍、俱賸、壹子、自己と一串」とあるところ數異斂の「源空が信心も、善信房の信心も、<sup>（心も）</sup>末よりたまはりたる信心なり、さればた一つなり」とある所と照合すべきである。斂も信心もた一つであるからこそ全人類の思想はた一つに一致するのである。これが布斗麻呂の根幹である。天子御柱はめぐりが在る所に立つてゐる。七條氏には七條氏の柱が、島田氏には島田氏の柱が立つてゐる。その柱が立つたところが宇宙の中心、天之御中主神の座である。

俱賸の指は杖のように直立してゐるが、これを横に振ればそのまま諸法の実相を截断する斂であり汚濁である。葦山が宇宙の自由に切り開く。正面に直立に交還する時五百箇葉樹木と云ふ。斂値では正眼の構へに当る。その樹木を横に振ればそのまま枝ひ（張望）の帯である。

（第四則 胡子無鬚）或庵が著した。蓬塵に何故鬚がないのか。神は眞実を参すべく、鬚は實際に悟らなければならぬ。この蓬塵は直接一度會つてみて初めて判る。そうでないとは鬚と無鬚の両つに分れる。

この指を立てればアオウエイの次元が現はれ、これを横に振れば時空向、諸法の実相が現はれる。葦山の重畳、一切を向、出世向のあらゆる向道と解脱を行く。沖此神道に於て

是字の意義する所

あの指から日月が現れる。白隠は度々手を二指してその角を向くと向ふ。



癡人に夢を説くべからず。鬚無し達磨など云つて、明白なことを却つて判らざる磨は武帝を叱り、慧可を辱めた達磨は神助活動せむ。その時用ふる知性の種族

梁武帝が達磨を認見したが、達磨は何者であるか判らなかつた。帝は後定公に向かひて觀音大士が佛の心の証しを伝へに來たのだと教へられた。有鬚の達磨は中國に渡來した印度僧。無鬚の達磨は三十二相圓滿具足の法(アルマ)の現はれである。觀世音菩薩である。これより相の達磨と無相の達磨として區別してもよい。

イエスキリストはナザレの大工の息子で、これくの手をなしたと聖書に記されてある。その男がどうして神の愛子であり、救世主であるのか、釈迦はマカドニアの王子悉達多、それがどうして佛陀であるのか。だが千方言を費しても彼等が神の子、佛陀であることの証明にはならぬ。キリストが神の子であることと波みづから証明せよ。これがキリスト教である。釈迦が佛陀であることと波みづから体得せよ。これが佛教である。禪内に云ふならばキリスト教も佛教も全体が夫々一個の公案であるに外ならぬ。

神代史を續くと太古の天皇は全世界を統率指導し、諸民族の王達の参見を受け、みづから全世界を巡幸された等々と記されてある。萬國棟梁天職天津日嗣身光天皇であられた。然しそれがどうして世界の王の王、主の主、師の師、神の神であられるのか、証跡があるだけでは証明にはならぬ。神代史の研究者は神道に暗く、神道家は神代歴史を白眼視する。神代と神世(神界)が西つに歧れて一つにならない。

正史上の達磨と真理としての達磨の両つの意義を、字真枝のフライングの鳥を合はせるように如何うしたら一つに合はせることが出来るか。神代と神界はどうしたら一致するのか、ここが一致しなければ正しい歴史ではなく、真実の神道ではない。皇典古事記の両者が一致した観念に立つて稱されてある。「第三文明への通路」も同じ見地から述べられている。

布斗麻迹の上からも少し精しく説こう。言靈才の達磨は正史上の人物。この達磨は鬚のある表家としての胡僧、アの達磨は達磨大師と讃仰される菩薩であり、エの達

泡元

神家の神師である師家としての達磨である。

障が相違すると事物が異つて見えぬ。異つたままでもまごまごの状態を自己分裂と云ふこの分裂を檢校出来なくなつた時が発狂である。この人面を四ノ知性(アノウエ)から見た夫々の達磨が一つの達磨になつたためには前記の俱礙の橋をまたがらなければならない。その相の活らまき哲學上で統覚と云ふ。統覚の實體は言靈才である。その指である天竺の御柱の泡元を自由と認り降り出まらぬはあらぬ。

つんせごせや  
まほくの益若集やキーの  
益教玉下ぬれせ從藤に  
無句へんみ當こり、如蘇歌祭

段 16



無門閑研究會 (第三、四回)

八月十三日、二十日の両日皇宇研究所(小笠原方)にて南條。末合者下記の諸氏(後藤忠元、島田親浩、所健一、林嘉一、七條記實一、高木節子、石川佑二、井上大敏、小笠原孝次)。神道と夏調とする公案の提唱と審議が行はれた。

生半可な慈悲も同情は  
本会には無用である。

(第六回 世尊拈花) 靈鷲山の法華經講義の席上、世尊が蓮の花を掲げて無言のまま衆に示したが、誰もその意味が判らぬ黙つてみた。たゞ迦葉だけが世尊と顔を見合せて微笑した。世尊は云つた。我に不立文字、教外別伝の法がある。今これに迦葉に伝へる。

世尊は花を拈じて佛教の真義を示した。素晴らしい切徳である。迦葉は何を伝へたか。それとも何も伝へなかつたのか。何のために何も迦葉に許したのか。

花を執つて示したからには説かんとする所は既に見えてゐる。迦葉がそれを見て微笑したからにはもう如何うする事も出来ない。東洋の神秘哲学である禪が此処から発祥した(原文略解)

世尊が花を示して何を説いたか説明しても役に立たない。俱胝の壁指もこれと同様。覚者の悟りは言語や文字以前の消息である。言語や文字が其処から出て来る創造の淵源である。

第三文明会に神解が樹つてゐる。華曼の花が掲げてある。それを見ても破顔微笑する者が眼覚めた會員同志である。見えぬ者はなほしばらく自己の内部を彷徨し、或は他所を迷ひ歩いてゐればよい。此の会は無功徳に住して個人的には何の利益も得られなれない。自己の生命の光りを以て昔ねく世界を照らす会であるからである。一人、二人、三人と宮柱、鼻柱が束つて、三十二人の宮柱が並ぶ時、形而上形而下の五十鈴宮、百敷の大宮が構成される。新たに降臨する天津日嗣を其処にお迎へしよう。

(第七回 趙州洗鉢) 趙州和尚に或時僧が質向した。「こちらに修業に参りました。御教示下さい。」朝のお粥を食へたかどうかな。「はい、頂きました。」それなら飯道具を洗つておいて。その僧みづから省みる所があつた。

趙州は眞実を臆蔵なく説いてゐる。若し此の僧がそれを取違へたら、鐘の音も變の音と聞くだらう。

燈を明かに知ろうとする爲に、却つて会得を遠くする。燈は既に火である。敢て



刻下の一事一務を  
正しき心でせしめて

火を求めらる必要はない。御飯は既に炊けてゐる。食べたいすればよい(原文大意)

此の僧は若い真面目な求道者か、或は中年の相当に修業を積んたてである。趙州はその心境をよく見て答へてゐる。佛は生き物であり、禪は刹那々の生命の活動である。人生とは當に為すべき事を次々に為して行く過程に他ならぬ。我等の周囲には為すべき事が限りない。その手近かな事、緊要な事から一つ宛先付けて行けばよい。怠惰する者、手を挟いて居る者は主体性、創造性のない死んでゐる。この事が判らず抽象的な理屈に赴こうとするところを趙州が指示した生きた教(鐘)へが、つまり話(鐘)に聞かせる。

今朝初めて此の世に生まれた心になる事だ。毎日が天地の初めであり、刹那々々が創造の出発である。生まれたばかりで何をやつてよいかわからなかつたら、先づ呼吸する事、食事すること。何は出来なくとも部屋の掃除、庭の草取りはやれる。眼先の簡単な仕事を自分の仕事として金盃を打込んで行へたら、やがて人生の万事に一つく意義が見出される。意義が見出せなかつたら皇運の歴史を聞いても、三種の神器、摩尼宝珠を守りし何の足しにもならぬ。

(第八則 兼仲道車) 月庵が僧に向ふた。昔、黄帝の時兼仲が馬車を自働作り、両輪を取去り、軸を切り離した。一体何を明かにしようとするのか。

これが判つたならば眼は流星、気鋒は雷霆の如くなる。此の車が廻れば四輪上下、南北東西自由自在(原文大意)



佛法神道の目的は転輪にある。これを目足車と云ふ。転輪の根柢は統覚にある。統覚は叙である。叙の治らきは分析であると同時に総合である。太刀は断ちである。宇宙の实在実相を分析する。叙の治らきによつて木玉(アオウエイ)、曲玉(三十三子音)が現はれる。その玉(重)を同じ統覚のも一つの治らきである。祭り(身約り、通覚)の作用によつて第二次的に整理綜合した宇宙図(曼荼羅)が八咫鏡である。すなはち叙を以て大自然を剖判分析して聖を得、その聖を整理して文明の原理を完成し

これを統覚、統覚の二法と云ふ。





五道が神道在斗麻底である、観鏡三種の神考と云ふ。

(第九則 大通知勝)

綱陽の讓和尚に僧が向ふた、法華經の大通知勝佛は十劫の同道場に坐はつてゐたが佛法が現はれなかつた。若し成佛出来ぬ時は如何うなるか。なかくよい傾向だ。同道場に坐はつて居ながら何故成佛しないのか。彼が成佛しないからさ。

大通知勝は自知自証すべく、観念的に理解したとて役に立たぬ。凡夫がこれを知解したならばそのまま聖入である。聖人が理解したならばみづから凡夫なる事が判る。肉体を解決したかつたら心を解決するがよい。心が解決すれば身に愁ひがない。若し心身共に解決したら神仙である。それ自体で充足してゐる小宇宙であるから、解位も封録も不用である。(原文大意)

大通知勝佛は法華經第七化城喻品に出る。この公案は佛を宇宙の理体として見ることと、生きた人間として見ることとの間の懸隔である。人間が十劫の同道場に坐はつたとして、依然として人間であつて、宇宙の理体法体としての佛には成らない。このこと一番よく心得てゐたのは親鸞である。その人間が人間である事がすなはち佛である。成佛しない事が成佛であり、大通知勝佛はそのまま佛である。列へば伝説の役行者の如き心身下下の神仙を信するかどうか、未だ合つた事がない。

人間が人間であることの全貌全局を明かにした道が神道であり、その明かにされた法(道理)が在斗麻底である。此の精神の法が人類(皇祖)によつて発見完成されるに到るまでは長い年月を要してゐる。科学が今日の如く発達した歴史を経過と同様に、三千年乃至五千年の時向と全世界の覚者の努力研究を要した事である。佛の法を法としなければ人間が全き人間有り得ない。眞神、法在斗麻底と法としなければ神道ではない。

(第十則 清税孤負)

曹山は僧が向ふた、私は佛の教(法)を守つて孤獨で貧困です。どうして御布施をお願いします。山は云つた、「清税さん、税は「はい」と答へた。山は云つた、「麩の生一本と三杯もつつけながら、また「口を濡らさぬとは何事だ」

聖階  
神考を思ふ

人を支配して神道も考へようとするのは神考の心算。

大がたであることが大の成佛のあり、猫が猫であることが猫の成佛である。

具寡



